

浜松市博物館館長講座

伊場遺跡の赤いよろいを語る

令和7年（2025）3月2日 鈴木一有（浜松市博物館）

1 はじめに

伊場遺跡の調査と木甲 三重の環濠 1973年及び1974年出土 弥生時代後期（約1900年前）

2 伊場木甲の詳細

前胴と後胴 ヤナギ材 精緻な彫刻 黒漆と赤漆 赤漆の成分（ベンガラと朱） 漆塗布の順

3 弥生時代の木甲

組合せ式と刳抜き式 弥生時代中期と後期 分布の違い 翼状突起 深江石町遺跡 伊都国

4 鳥装の武人

弥生土器絵画にみる鳥装 狩猟文鏡にみる鳥装儀礼 弥生時代の鳥関係遺物 模擬戦

5 縦長板甲と木甲

新羅と加耶の鉄製板甲 分布状況の特徴 古墳時代の木甲 鉄製短甲の系譜

6 まとめ

伊場遺跡木甲の歴史的意義



図1 伊場遺跡の木製よろい（木甲）（左：後胴 右：前胴）

いずれも伊場遺跡の三重環濠から出土した。それぞれ離れて出土したが、同一個体と考えられる。全体形状がうかがえる貴重な事例。出土から50年が経過しているが、この事例を超える良好な資料は出土していない。

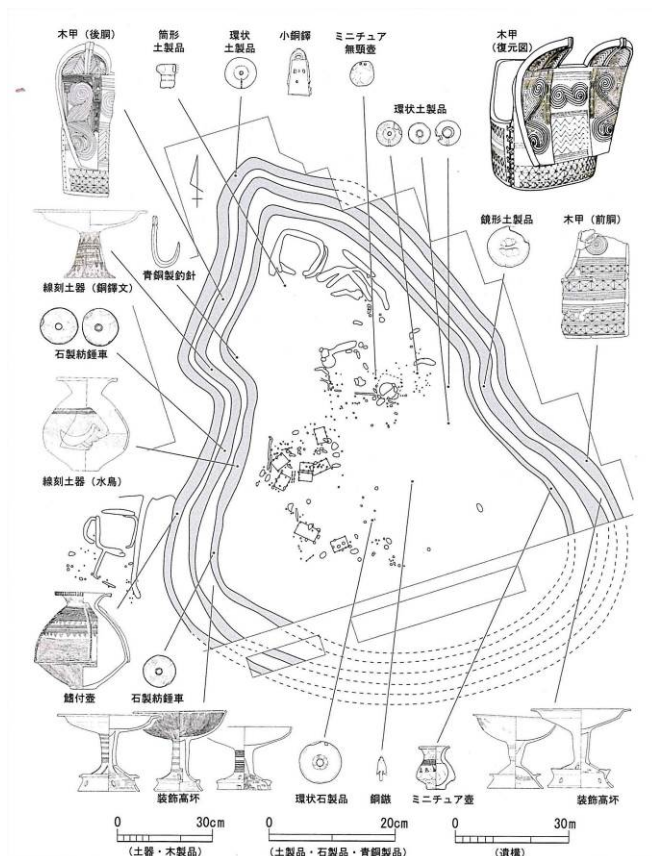


図2 伊場遺跡全体図

三重の環濠は異質。出土遺物も特殊なものが多い。



図3 環濠内の弥生土器出土状況



図4 筒形土製品

木甲の模造品と捉えることも可能であろう

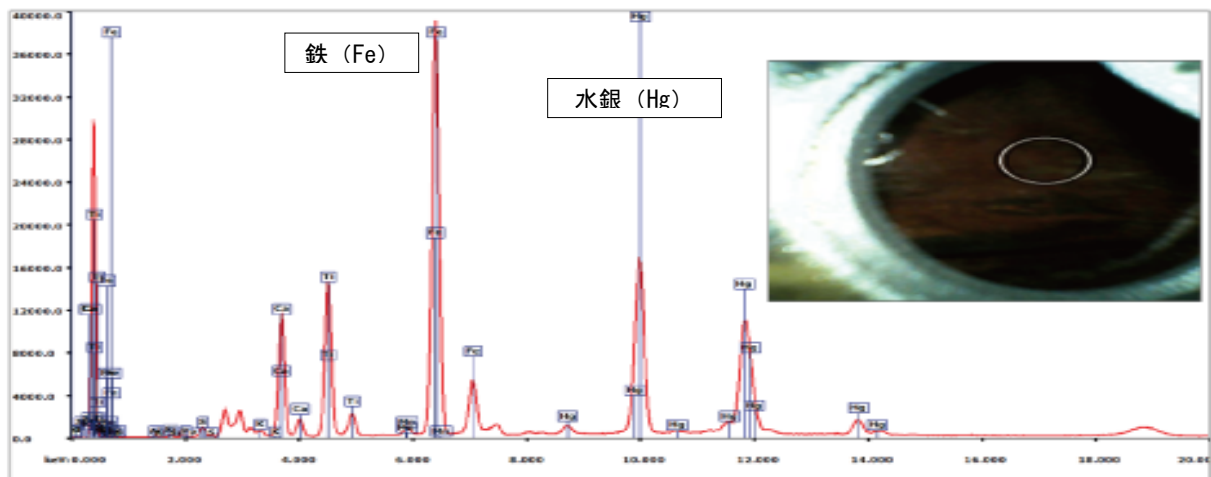


図5 木甲 赤色部分の蛍光X線分析（後胸）

鉄（Fe）とともに水銀（Hg）のピークが認められる。ベンガラ（Fe）とともに朱（Hg）が用いられていることが分かる。

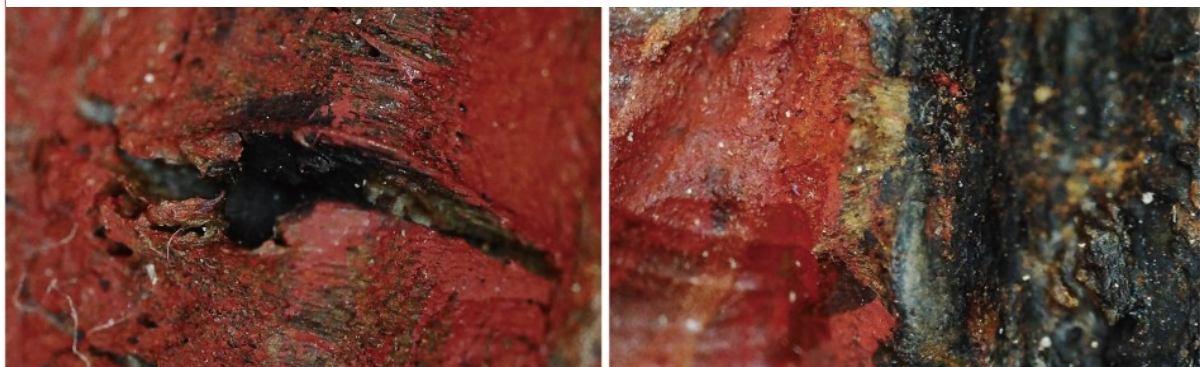


図6 マイクロスコープによる木甲前胸の色塗り分け観察（右：前胸同心円文、左：前胸上部）

浜松科学館の協力により表面の詳細観察を実施。黒漆の上に赤漆を塗布している状況が明確になった。



図7 弥生時代木甲の分類 (左:組合せ式(南方2号)、中・右:剥抜き式(伊場、深江石町))
組合せ式は弥生時代中期に、剥抜き式は弥生時代後期に多くがみられる。深江石町遺跡例は伊場遺跡例と類似点が多い製品。

表1 弥生時代の木甲一覧

番号	所在地	遺跡名・資料名	時期	材質	特徴	その他備考	文献
組合せ式							
1	長崎県	里田原	前期末～中期初頭	落葉広葉樹か	長三角形・長方形部材		田平町1988
2	佐賀県	生立ヶ里	中期前半	落葉広葉樹か	長方形部材		牛津町1995
3	大分県	大肥	中期前半	落葉広葉樹か	長方形部材		日田市2006
4	愛媛県	阿方貝塚	中期前半	クワ	長方形部材		神谷2010
5	岡山県	南方2号	中期中葉	クワ他※	長方形部材		岡山市2005
6	岡山県	百間川兼基	中期	カヤ	方形部材		岡山県1997
7	石川県	八日市地方	中期中葉	ヤマグワ	長方形部材		小松市2005
8	長崎県	原の辻1号	中期後半～後期初頭	落葉広葉樹か	左前胴上部材		長崎県1995
剥抜き式							
1	福岡県	惣利	中期前半	落葉広葉樹	加飾系(翼状突起)		埋文研究会1996
2	岡山県	南方1号	中期前半	アカガシ亜属	加飾系		岡山市2005
3	長崎県	原の辻2号	中期～後期	落葉広葉樹か	未成品か	後胴未成品か	長崎県1995
4	福岡県	今宿五郎江1号	後期	クスノキ	加飾系(蕨手装飾)	右前胴	福岡市2014
5	福岡県	今宿五郎江2号	後期	落葉広葉樹か	加飾系(翼状突起)		福岡市2010
6	福岡県	深江石町1号	後期	カキノキ属	未成品	後胴半完成品	糸島市2024
7	福岡県	深江石町2号	後期	カキノキ属	未成品	前胴未成品	糸島市2024
8	福岡県	深江石町3号	後期	カキノキ属	未成品	前胴未成品	糸島市2024
9	福岡県	深江石町4号	後期	カキノキ属	未成品	前胴未成品	糸島市2024
10	静岡県	伊場	後期中葉	ヤナギ属	加飾系(翼状突起)	前胴と後胴	浜松市2002
11	愛知県	下懸	後期	トチノキ	加飾系	前胴か	愛知県埋文2009
12	富山県	江尻	後期	カエデ属	加飾系	右前胴	富山県2014
13	奈良県	大福	後期後半	トチノキ	無飾系(紐通孔)	前胴と後胴左半	桜井市2009
14	福岡県	板付	後期末	—	無飾系		福岡市1982
15	岡山県	鹿田	後期末	トチノキ	加飾系	後胴右肩	岡山大埋文1988
16	福岡県	雀居	後期～終末期	カキノキ属	加飾系	後胴右半	福岡市1995

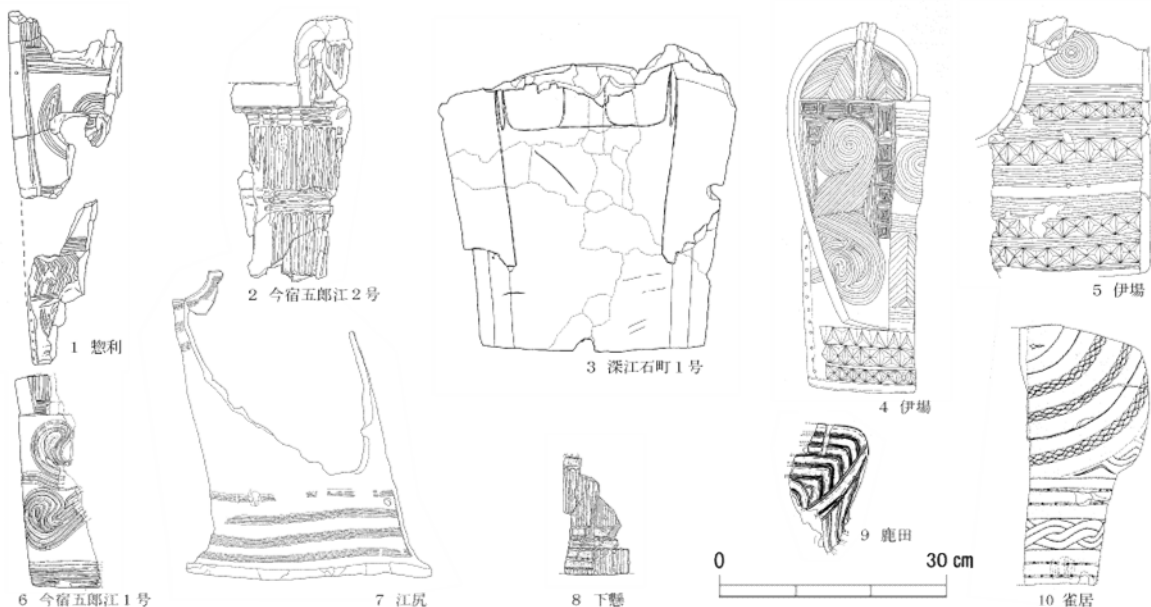


図8 弥生時代の剥抜き式木甲

弥生時代の剥抜き式木甲は、ほぼすべて彫刻が施されるなど装飾性が高い。伊場と同様、翼状突起をもつ事例も増加傾向にある。深江石町1号甲は、未成品。



1-1 深江石町遺跡全体写真（北東から）



図9 深江石町遺跡の立地（左）と航空写真（右上）及び木甲が出土した土坑（右下）（糸島市報告より引用）
深江石町遺跡は福岡県糸島市にある。玄界灘を望む低地にあり、伊都国王墓が所在する三雲遺跡群とも近い。



図10 伊都国と各地との交流（伊都歴史博物館『ヤマトと伊都国』より引用）
弥生時代の刳抜き式木甲は、ほぼすべて彫刻が施されるなど装飾性が高い。伊場と同様、翼状突起をもつ事例も増加傾向にある。深江石町1号甲は、未成品。

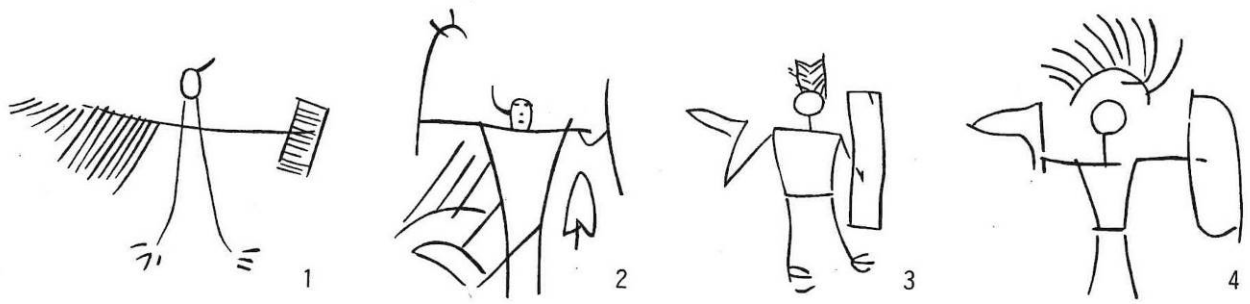


図 11 弥生絵画にみる武装した鳥装の司祭者

(1：熊本県神水遺跡 2：佐賀県川寄吉原遺跡 3・4：奈良県清水風遺跡)

武装した鳥装の司祭者とみられる線刻絵画は西日本を中心に複数例認められる。いずれも盾をもち、頭部に羽状の装飾をもつ。また、戈とみられる武器をもつ事例も多い。模擬戦に向いた姿とみられる。

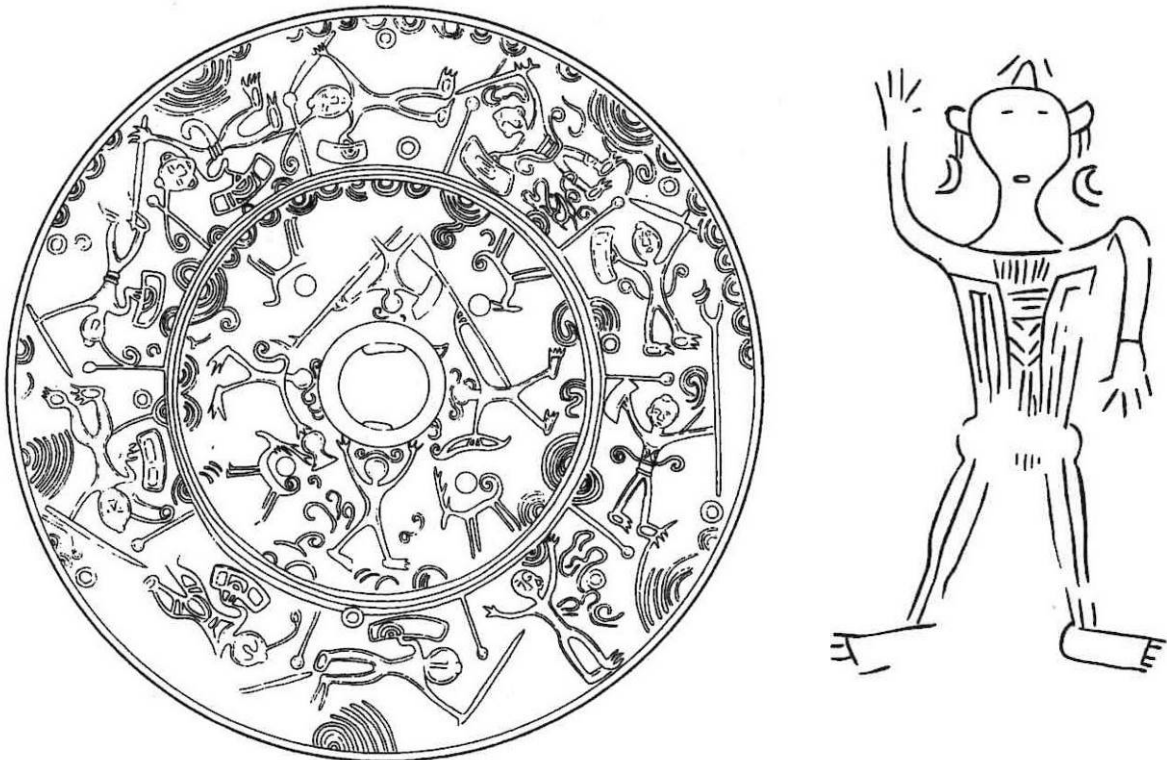


図 12 古墳時代の鳥装の武人 (左：狩獵文鏡 右：京都府黄金塚2号墳)

狩獵文鏡の鏡背模様は、古墳時代の祭りの様子を示したものとみられる。武器と盾をもち、頭部には蕨手状の飾りがある。



図 13 浜松市内の弥生時代後期遺跡から出土した鳥関係資料

(左：鳥形土製品 (将監名遺跡) 中・右：鳥線刻土器 (伊場遺跡))

鳥形土製品は、鳥の頭部を注口として液体を注ぐ場面に用いる。線刻絵画は水鳥を表したものとみられる。

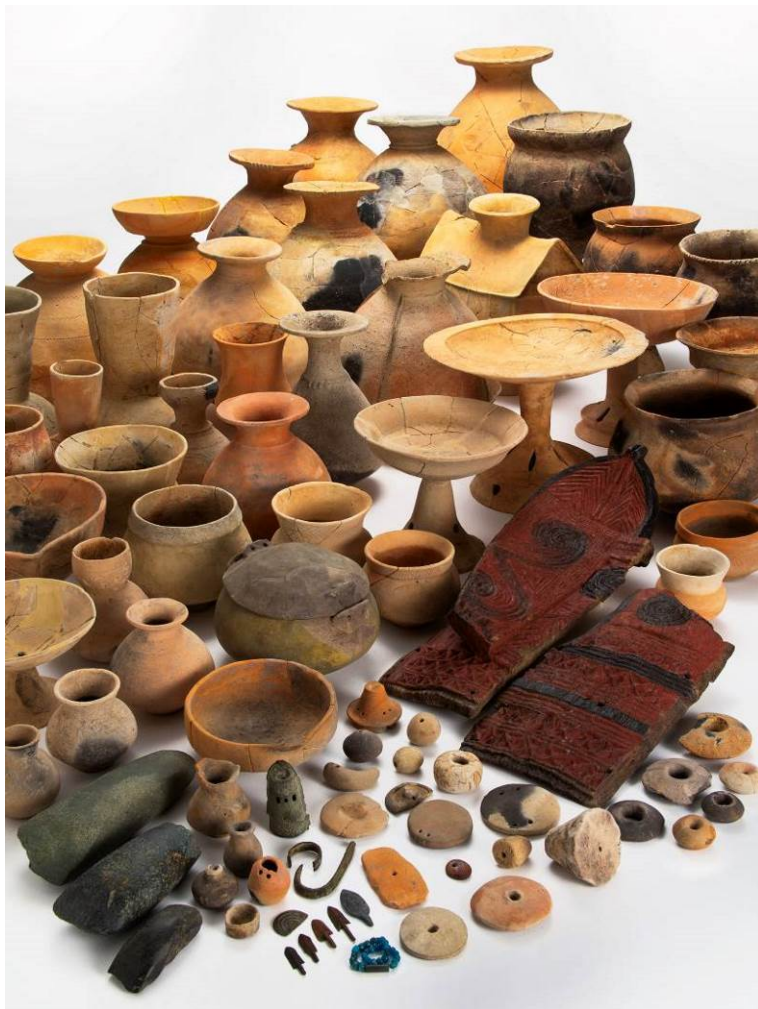


図 14 伊場遺跡群の主要出土品（左）と青銅器（右上）、装飾高坏（右下）

伊場遺跡群からの出土品は、特殊な遺物が含まれる。装飾高坏もその一つであり、その集中度は他の遺跡を大きく引き離す。



図 15 環状土製品（左）と環状石斧（右）（左：伊場遺跡 右：坊ヶ跡遺跡（弥生時代中期））

伊場遺跡からは算盤玉の形をした土製品が集中して出とする。匙面に一条の浅い刻みが入れている点で共通性が高い。環状石斧は中央の孔に柄を通して用いる武器。実用品というより、象徴的な意味の方が強いとみられる。



図 16 復元された縦長板甲（国立金海博物館『甲冑、戦士のシンボル』展において筆者撮影）
金海大成洞 2 号墳例を復元したもの。蕨手装飾や後胴の突起など、伊場木甲との共通性がみられる。一方で、押付板や裾板の形状は日本列島の鉄製短甲との共通性もみられ、伝統的意匠と海を越えた技術交流の実態がうかがえる。

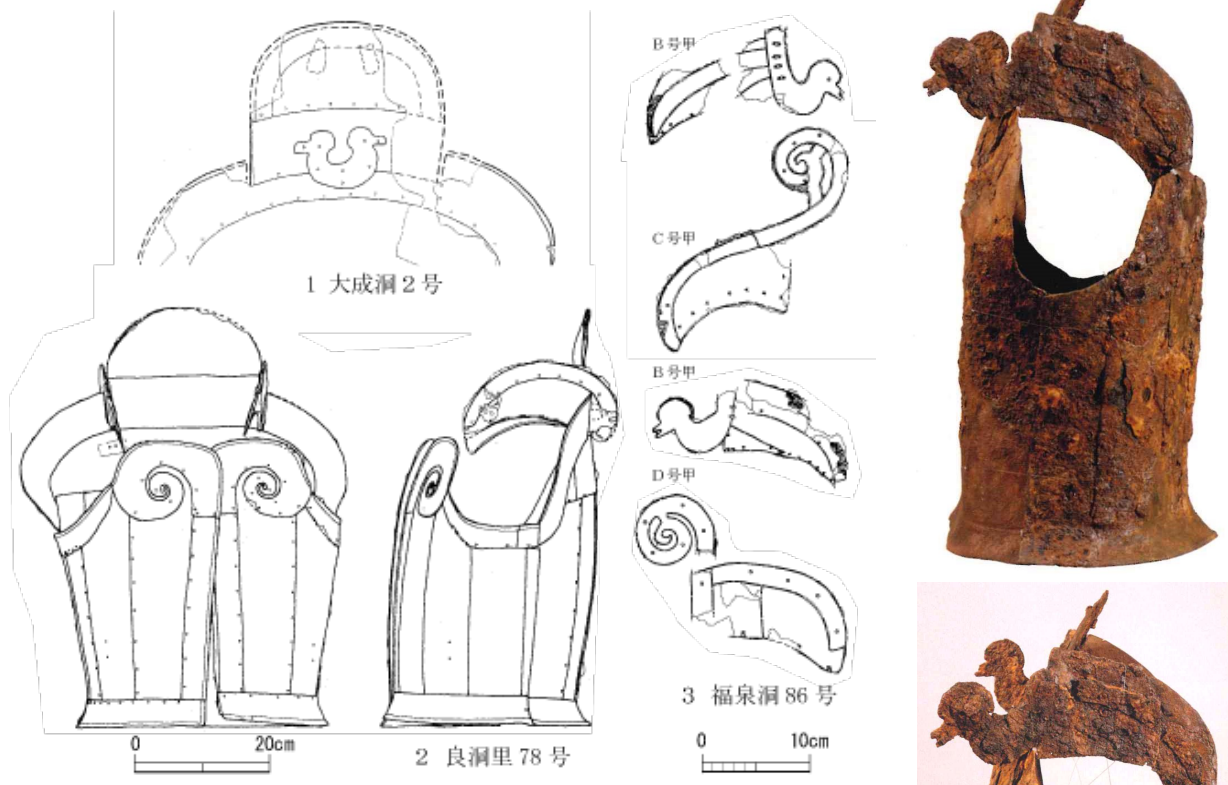


図 16 縦長板甲の諸例（左：各地出土例、右：釜山福泉洞 86 号（金海国立博物館 2015『甲冑、古代戦士のシンボル』より引用）
縦長板甲は朝鮮半島東南部の新羅、加耶地域に分布する装飾性が高い武装である。4～5 世紀の遺物であり、弥生時代との開きがあるが、蕨手装飾や鳥装飾は弥生時代の木甲との関係を考慮してよい。

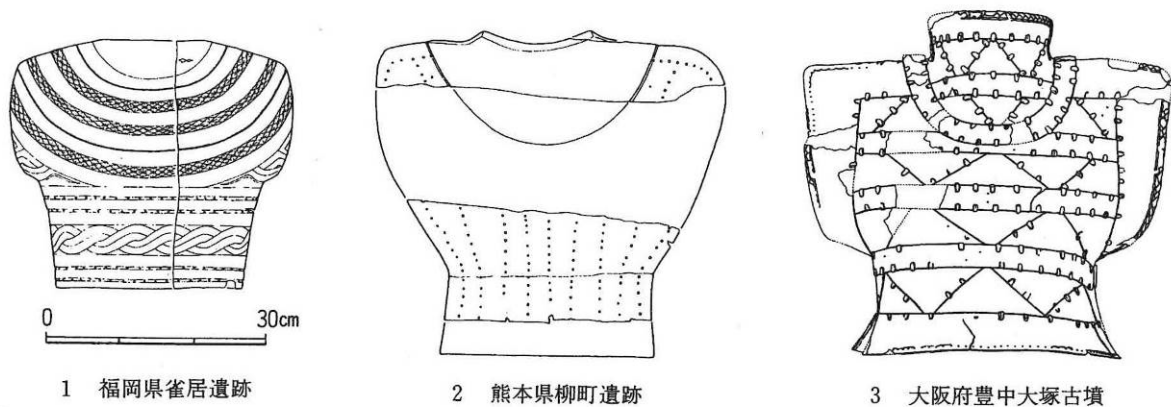


図 17 肩部が張った木甲と襟付短甲

1は弥生時代終末期、2は古墳時代前期、3は古墳時代中期。時期差があるものの、後頭部直下を半円形に巡らせる意匠が共通する。襟付短甲は剥抜き式木甲をモデルの一つにしていたことを示す。

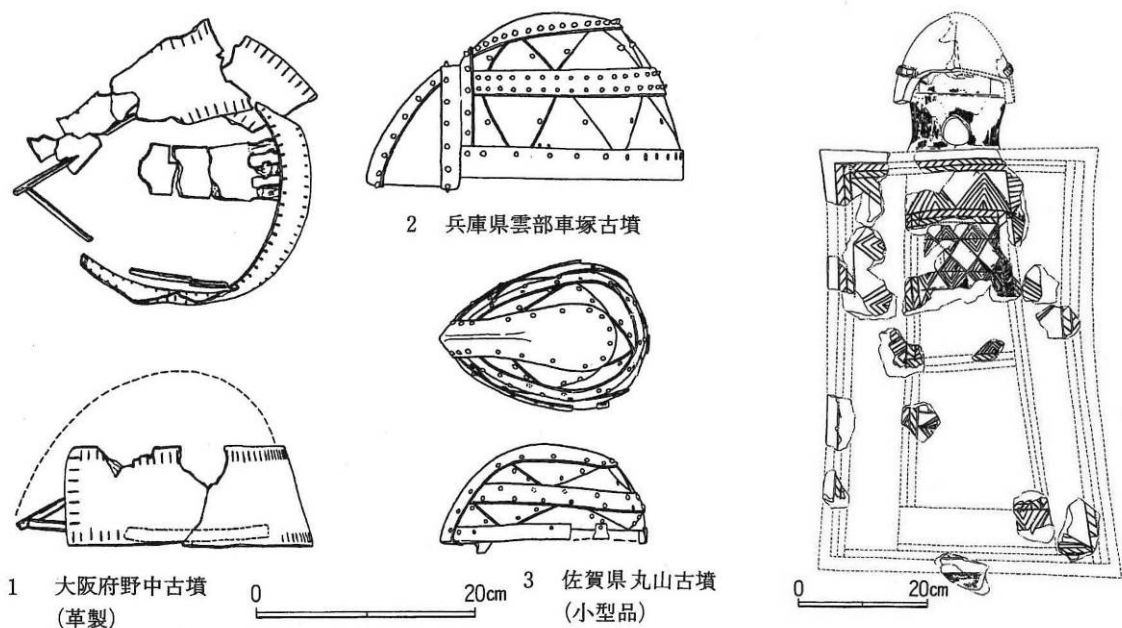


図 18 古墳時代の衝角付冑関連資料 (右：大阪府高廻2号墳)

衝角付冑には革製のものや、くちばし状突起をもつ特殊例が知られる。高廻2号墳のように盾と組合う埴輪が知られ、後に盾持埴輪としてさらに特殊化を遂げる。鳥の頭部を象徴する形状であり、頭部には鳥の羽飾りを取り付けていたとみられる。

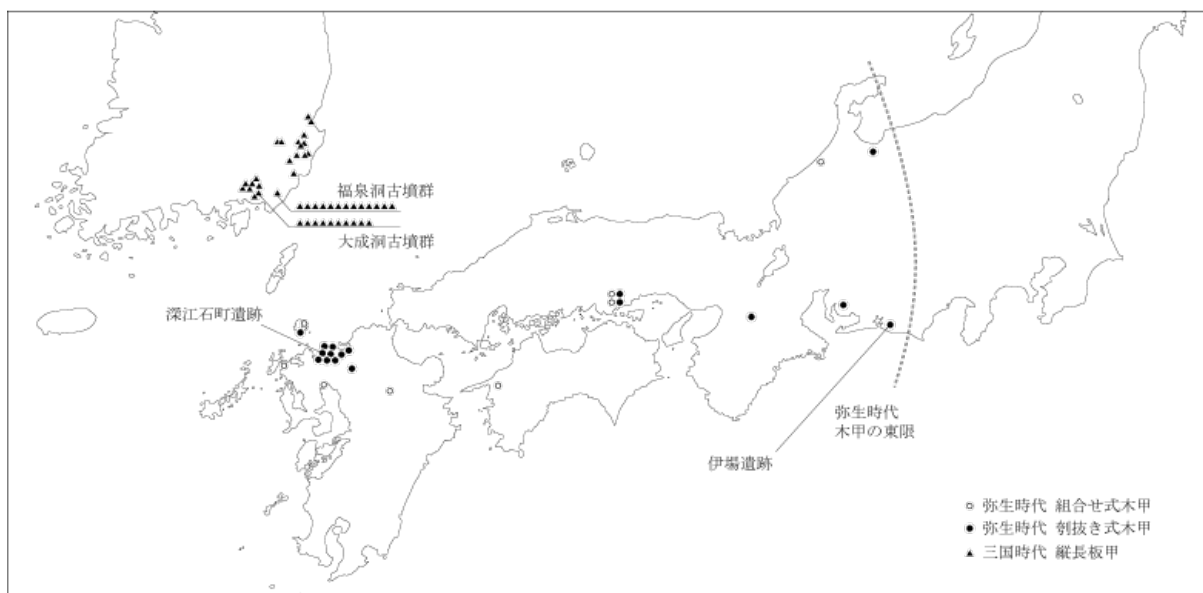


図 19 弥生時代の木甲、三国時代の縦長板甲の分布

伊場遺跡は弥生時代木甲の分布域の中でも東限にあたる。剥抜き式木甲の出土地は北部九州に集中する傾向があり、製作地の一つとみてよい。一方で縦長板甲は海峡を挟んだ対岸の朝鮮半島東南部域に集中する。